忠義太平記

二

遠13
1479
2

門へ 13
號
巻

忠義右筆記大全巻之第二 三

目録
三人の源士賀茂川より来る事
大岩内匠助宰人と城中に入る事
三人の侍殉死誓約の事
[illegible]
木と実の対ごろう
仲事

八天竜と賣事
中孫沢豪金沢を攻て大敗の事
弓鴻寺義七忠志ふかきこと
むこう
生捕事
賀古川城中殉死評定の事
城中の法花十方ふ離散とる事
尾張右門用ふ塾居の事

三人の浪士賀古川よりこる事

塩浜編よりいること河のり。言をもりてくをわづらい。色
りてるをおとるごこそとり。義わりたり。法
う勇ありりがいよ。矢吉よ海をもりふとこ。ふ信信信
ども。のが逃れ西死の湯よりつりてそ。義士
は信いわ。これ川ふ。ふそこもむ。孔まふを。巧云
今迫ハ。ふ。ふ。ふ

一生一海上よりふ孫をうつめ。ものざうの士卒を出。武
巖室よりをつへうり。後金の屋形よりあり。しかどもよ
ぐて海ざ一わるもわりしかど。あまをあ義仲を義よ制せ
ら毛。んかゝ一ど。ものより人るとをゆどそのゆ中ゆを新参の
士。孫四郎室。海辺寺の素らへの制ひゆをくつず。ゆ
よくとをのび出。笑右川よをつきぬ。こに徳井を開
九郎源。器海能室とゆをのありこれいた年いて
のこしたり。海寧ゆ男とをりしゆ。後を丹下どのふ毛
ひ生寄よおよびしはゆをかゝたへくれく近
年を毛をゆの。海をりとゆひかゝたよんうりし
海学恵と。今新ぜどんびわるをうず。これ勇士の意
仮なりと。三人て海を知をりよして。世よをとられる

寧士の男へ。家来とてをあらべくそおのくこづう
見奥をかなひ。手をれし強を杖よつゞ。笑右川よ
くをつくて。強出をそのまくに。近手の源川よくて
ゆ。素問こゝて。家を大義中毛。助よゝめ中れく
こゝ先年をこゝの友ゆりて。海人の男とをりし。深
海流浪の男とをりて。こう紀年月をおくりゆ。おるよ
ひこび。後を中毛能部。出生寄よおもびしは。能
よゆよゝるゆ。紅源そでをゆしゆわり毛れ先こう
ゆりて。義源の人数乃中へゆくよへ下れゆ生おの
大意。これよすゞめて。およゝずかゝゆゝをのゝこう
こをを行り。黒まのゆ学恵と。新しゆしたくゆと。よ
ゝをゆくぞこうる。毛をく助。をたくゝ感源をおゝへさ

てく感じへうし出ん屋わつを見ると云ひつぐ。
をり見ると赤坂へ入まと云うえんこゝかりぐう。新城ゆて
を云ひつぐ。まぐることを為さ為べ今れど。よへ射して毛ば出うう
みひゝず。遂ん云てゐをこうへいおのくと一人ゆそを。ま為さわつ
ひへこゆうへ物。浪人とわつめうりゐんど世のとり沙法よお
よむんへ来代まで乃振撞。無名をこうりゑべ。く出世ける
うへへ。とそよ名志の移わうる出て。命と三系よ。うなげ
ら見たる国事。出国要よおゆて。振ぜられうるとゆ代め
ゑ出理と納得ありたゆわくれへつとうるべ。。慈勤よの
べれば三人にそうへ出作むよ出ん入へ。化家の浪人ゆうも
よ乃ゆこへをちぐかりうる。我こゆ系の出動気の文れ
ぐそ。出乃ゆ。ま上動道の法士我濤ゆて。出ゆ。ゆる

事右今よを出ゆ事ゆう。こく大変ゆうんと事移ん
ゆへ出ゆさけ早く坂国へ入くこれ出へと。ゆるこ為くゆう
ゆる。中部動ゆんゆへ名へ出ゆとゆ中ゆん義右
とゆゆえん。物を義坂学候とれゆ。出法右の出宅板出下
向ちゆくゆり。法右奥。関弾又面く。薬法そうぐおゆ浪
し。出坂上へ出浪しゆゆこ出ゆ。の影へこ義出たつ移
よあづゆべしたぐいよ法おゆを。ゆゆこ出ゆりこうゆ
んよいひそれば。徒井をこゆるよこてへゆりとくのよゆれた。
無人のゆも理よ服し。ゆう出毛出ゆと。中出動よ
礼義をのべゆれてをゆる。く動気をゆうゆし浪
士乃ゆあてゆこと。国系のわこと移ゆんのをこゆりそれ
よ藩代重悪とゆけ。事解を喰ゆゆゆゆと義との二

をもとれいのちとあらんでのがるんとちろうのとも。因ぢ
はをうてし去る。孫兵衛ひ赤いろうなりてゆげうらをとく
ひ。中ゆをもうらはといはれて。法士をひさ酒つ勇気をも
えげまし。ひべうさ。大飛木十郎兵衛おやこ。腰痛をのく大ねと
なりて。年ごろたなをうさ今れよ酒ひ。書ゆをあい
し。分命をあしをのうへゆをゆ代ゆをたうず。城中よ
たうへあり。大分の金銀を。おの道ゆ家をうがひよゆ。ひ
うしくうあをりゆうふをして。分をのがるんとうづ
を西乃丸。黒をして。大将父子と。雲泥万里のゆ中
なり。されば生をゆんで死をふらひ。人情のつよ義を面
りうぞうゆ事世のかうひ。大飛木よ一味して。うづうんとた
くひとのゆをく。大将よ同をして。死をたのしむゆ道

かうべし。城中乃法士三百八十餘人のうちより。大将よ
一味同心して。殉死をおりひさごめしものよづうゆ十二人。
紙をうをて血判し。一湯必死のちうひをなしゆうをごくそ
ろをりうれ

大野木十郎兵衛父子大義死す

あうもやげよいめへ。驕慢ゆつもをうをごく。法度をそ
うごして。あを職をしうふうけ。賄賂これしをつうひこと。
響のごくくまたうのごとし。利欲のをよて法をうけ。下を
あかどりたをせうげ。ゆをゆをうでいといぬうをつを。威勢を
ふうひぬうりひが。今ひ約ゆよのぞんでゆ。高慢よをうれしをあ
けどり。立ゆをたうまびゆ。ゆをゆをうを。天よせうがり。
大地よゆをうをして。大将ををうめ。同志のものどもいふよ

おなじ。そのうちのるとり。ふるのまぢをいまハ何とやら
あそろしくかなうるうるとなる。所時も出居ハ壹
なりとぞのびくよ。紬家雜具をもこだもの。けもの多
夫婦。そのみ此年ぞ来れものども引つ出その若ハ八つの
とけいすぐて。ひとりをものびのうけるがわる孫長女が乳
母のふくろふいぐうる。新屋よ寢てゐるしをさすがハ悪
ぢのもろ。此年ひとをつ出てのうんとひしをナ多素大
よ制し。ひとをとろハふ後なるども。乳母めハ用ごろ何と
をもろめ。まやくらの妻法をのりまろふ仏ぬて。ぬ出くよ
同んせど。ぬし法家中よりしがべいうの雜義ら出来ん
大事のまへのやうハのらこそ拙ぢひよそのうへわ出ハあみろ
こと。ちてこ物をとそをもも此もか。小のひしをとろして大の

ひをとをとく所とハ右人のひし金云ぬりうるずあ此
ハおりひうる出。来絲かん紙ものつまハそ。乳母をとく寢入り
たりおくだしをとかとうやうをて。現生の孫をもて。はりまろ
せてあげゆきうりやう屋くく嫁下をもあらのびてひ孫のおどり
をもづあさのをひ懐州細干村よ。母ろのいをと。三谷長平と
いふ浪人。こ出ゲ方をとこ物ぢて。三谷ぐろへうづひりしよ。
長平中くく同んせど。ぬ出ハ十ケ年筆。浪人の男とり。尾張
ハうらかうせをとそ。ぬうぐろて門ぐろをふ後ぢど。一門のらあと
をとりしへのを人のたあふ。殉死をもとげど。狹ろくぐりし
てあげ来れうる。悪ちどの浪人へそれぐーぐ屋どをんど
ハハ門ぐをもふ後せぐろ。ぬうくうりのへとて。ぬうをそぶ
をうふつをぞそをもてうやまぐと。森三こくをつをと

よわよぐず。とぞ〳〵と立出。さて〳〵義理とちうぬぬめと。
目がふ義理ハおりまとれそ。しつもく。さまざまひゆく。玄さうて
出るちんぷさうりてへるとふとぷ分ふちうざろ玉人ちうこ
ぢとりつづくへゆく。ぢうぞと。ぢく〳〵ぢ葉をめぐりして。年
ごろ恵とりどこ〳〵をさ〳〵。一郎知事ハ名れぢ。ぢづうへ。玄
ちのぢんをやとれだ。まびハぢ坂川庵橋より巳玄泰居とい
醫師。一門のすきわ通べと。これが方とこ弥ざ。私ふとり
のりとう通ゆく。塙坂のくびのうれすよ。波ちれご病とうう
めしうこい。玄平めがふ理屋さて。これとちのだ孫さて。
歌とわうし月とうう。大坂ようさて。川庵橋より。りし。
泰居面ちつ孫ちうず。私れべ丹下どの出生害わりしよ
つう。京中鶴城の月ちのんぢ〳〵。ちりぬ江世ちうまびと

はは自分の家を職業にしてまいり孫梁しのゝべき身の
いまゞ城もとゝもわるゝざるふべき退これへ参りのゝへ孫ゞあけ
しとゝうけとり。おりゝて也後ゝせよゝ。泰春をたのんでれ
出かれんいまれか。先年をまの乃年とゝ人形よりさゞまを附
斗ゞとりかとのはたのこゝ。書状をて作こされし也ゝ人形屋
と吟味いとゝ。拙ゝ大ゞんの世話をもりてのそこのあり
ふこゝらへさをゝさゝ也ゝ。ふゝゞられ三文ゝ。孫ゞんの
せんさくをもよりて家切ゝちかゝとはたらかされでゝ。
今月のとき西かゝさまに。泰春とゝのゝとゝへゝくゝ也出
なされとゝ。いゝかゝく。一番乃者をゝるひゞゝ。ゝやく出ゝ
ゝはへゝ。納面ゝ和とわゝへゝらゝ。ゝそゝもゝく。世ゝまゝ世ゝお
ゝびゝとゝ義理ゝとゝゝ人ゞんゝ。今の世乃ゝゝゝゝのゝゝ。ゞゝ

くつぶやきかゞゝ。ゝゝゝ孫ゝとゝりのゝりてゝゝの波浪にこ
ゞゝゝ。海上ゝゝたゞゝゝのゝゝこゝ。ゝ日あまりと強て。竜ゝの
義ゝゝるへ代ゝの善提西ゝれゝ。今ゝこれへとゝろゞ。彼ゝ
へゝゝさゝゝゝか。ゝゝゝ中の百姓だゝゝとゝゝへゝゝ。冊下度
乃家をの男ゝてゝゝゝゝ。ゝ船どゝまでゝそゝゝゝゝ
いまゞ城ゝゝゝゝ

ひ出るゆゑをたづねるに、このあつまなりけるゆゑにて、

大坂屋九左衛門大坂本ゞ紙屋宗とあつる事

こゝに賀古川橋下の町より大坂屋九左衛門といふものありこゝ
ゞりとして大坂本十郎兵ゞ志のびより退る紙宗七十餘ちあ
づけをきしゞ。ちかゝ茶茶日雲坊ゆんど。公家の室宗ゞず
をあつず。又材木屋宗兵といふものゞりとゆを。紙宗九十
餘年まで此屋つあづけをきり。今ゝ世の世となりて
も多年の制法ゝでしかりしその威徳のこり居て。町
人までも上をあつぎ。ちのの法度。をそれ小城中へうゝふ
ゆ。中ゝ助大ゝ坂本ゝ。法体の足ごしよ
をもあつ。ひたゝ男なれどもゝりにゞ公会ゆるよこれこ
そ天のあゝへなれそれかど大分の紙宗をあづけをきゝ

うへからゝへをも河内よりてゝ。そのゝゝまつげ知せよ
とそゝことゞく封をつけ。市制とゆてゝ。ゞりにゝゝとべう
らどゝそゝゝこれをいひつをゆ。かるゝとゆゆを志
らず。大坂本親ゆのものどもゝ。伸の秋下旬のころ。賀古
川ようゝ来りゝちのびやうふ。紀友伝八田辺表ゝとゆひゝる
らひ。大坂屋九屋つゞ郎よゆゝ。あゝ笠ゝ郎ゞゝ奥へとり。
笠をとりて。何とゝ九九。をのゝちゝをゞゝしゆ。大分法具を
あづけをゝちゝゞ。世話よいゝゝゝゝあんゝ。ゝゝく。たゞ
今張とりゆゝとゝいへば九屋つゝゝて。まげゝ法堂固ゝ法度
かゝれ。張をのゆゝとゆゆ。それよつゝ。あづけかゝれゝゆ
ゝ法橋本へのをゝこゝゝ。中ゝ助どのゝり。検役をもつて
封とかつけをゝれ。ゞりふゝゝゝとべうゝずゝとの作ゝよ

てゆへべうこうひようべうてうぐてゆといふ。
ナ家系名をちがへそもへ伝たるべうこうこ
まりうりゆゑく助がえうひまてぷうふ封をつけあれどと
てつけをもてきくべうこうそれでーづわづをうこうへそもが
しにまこせよと。勇をとうへてうとひーうえ。亭主すこうを
おどろうどいうふをあづりゃしたもた。地方ちりの作分
もべいそで遠背かうんといふ。大胆まいよくいろて。
地位といふ事で。主殿用ト殿のへお果おされぬ。うま
を家をまれも家を。ゆゑく助と地位といで。それが
しを地位なり。うろうへうるとをりてをゆうむと。
九蔵つせらまうひ。位身分をいめーへお家の位家をと
うて今へうてゆけ中居は大ゆ。ゆゑく助どのへうてど

けるくとぐうこのあとをそうちびやそぎび南北のたのび
うりうまうまバ地ばどのあ〜どや。屬も嬉を一口よ。の
みこすぎたひぶん。鶴のま孫をうすとうやよこれね
ことやされあと。数刹問着をうちよ。ちや日を着
したそうまは時よ。ふくこそひとあをきて。四約ふ天うう
たふぶ〜どんのうちふふ栗して。光角あ〜そひやし
てもこれいたびひよあうけあひことのむねせんさくあり。
今霜いこれよとまうせあへ四日乃殆猿よいさとべし
とて。自分の用ものとくのへんたあ。あとてへで出ゆき
ろう。十郎兼その記まとよ。れさいとひとありひ。封をうう
第をあうさ。内よ入まをきたる。金み三百兵とうあし。
ふとうふをここて。をあ。四辺よ月ふせし。一同ふに

げて。ゆく家内のものどもこいうふとそのあとへうちをと
ゆうさ。ん主ハ第の対をうう。ふうとうこふとそをうう。
板へ内あう金拓とぬとこ出せしとあうこうとべをぎ九九
歩つをすびよやりけすをいへば九歩つ大よおどろうら
とうこ弟をりぎえおしねうまし。というちよ。町中乃
りのどもとうけつをて。やま大飛木のこうぬけ武さうてふ
あたけとうへよと。拓殖をとりたてゴ主をくとあつう
ふる。久あう所をまへ。とうぶうへ猪をこありたまべ。ちや賀第二
てう。いうこあこれいこう法へどとこ。ふくそだへうとう。
ここうりあよ。賀第のとぶまをうつとあげ。拓殖ゆそこれ
をこて。やま大飛木親ふのうこのぞと。ほう足ふり引ぶ
とゆ十郎と系。ゆ屋つ力のこうあ丸をはいしてこハ猪藩とも

ちゃうまいと。義勢して見ると猿藉とへたげ事ぞ。
とのまこそおあづけの。乙黒の封をきって。盗こと
ろ猿藉とのよと。大ぜいせ方もたりかり。親みが大
小とりざとりて。何をぬとこしをあずたぐうかり
てせんさくせよと。二人とも。ふたたぐうかし。さてこそ小
判三両あ。これが猿藉であるまじこそや。夫婦よりよづ
うちころせと。ぐ〳〵小杉撫し。猿ぐりかかりて。そ
きもり富和よりこうり。壁目白屋。法人のこをしめ。親の
うさあれとさせよとて。紙のぬりをおつせ。町中をよこ屋
んりきう人面獣ぬいねざうひとをたてれ
ひとかりぞを死かれぬいのちあさまきんこうと
こかつまちぐきして笑ひぬ

萩田平助大筒をうる事

大坂本が。縁ぬけ中月三人へ。をのくとかるものあり。
猛会亀きの長伊藤。義又伊三郎。伊丹義藤。器木
林助。小村嘉馬。武松八右衛門。十右衛門。蓋器嘉つ以下。その子
清兵衛つ。義兵伊四郎。田中十右衛門。蓋器嘉つ以下。その子
うぞへ。中ゆを萩田平助。同ぐく金平。現嘉つ以一家
中ゆをこうれるこ大くの天猛人。賢様調べよいろ
まで。何よこうくものあく。迷ぐ郎ゆへ。大筒まで。
ゆへのそ。それども西指せざるものへ。義の二つ名とと
てこうぐふへて。むげたこうらへこふのがつて。こうを
武士とうとこ。系人とおして。金のひろで世をまこん
と。猛ゆまく。二葉しこうが。ひたびかうけとうけたあむう

いろ〳〵お方へこゝ迄ぞい〳〵ざるものとそ大筒二挺うけとる
しぬこゝ迄と武士のおきさやいん。ゆうけとりのお大名
へ。必竟敵く同り多りたゝひ武士のんをとて。武具
大筒を拵部をとゝもあひまにこそるべれ。ゆへうちかく
ぶをうための大筒を。ゆうけとりのお方へうまとてわる
んの中。人りとわいうん三ぶとやいうん。つりや二りのちごのでい。
かりの不義いせうりまでとよりさゝしにてわり。猪倉ふ
ありし。丹下どのく。郡来たへぱひこをにうへうて。板高郎
ふをとゝもし如。七兵の石ケ月にゆ同るゞ名乃まかちへ
廣系のなゝ下向とべーゝ。りを南坊よとうかべりれ
兄貴が敵討とゝぐとうあ赤ちぐうふかして。同るゞや
けよひこゞりゆうゝ兵乃墳墓とおゞませんり又兵

後小松院よびかへすものいきあり。校訂した
ものとしてのきんとをぐら称してぞいうりる。清田
中納言。扇谷家盛つ。金松院。大井田小四郎。こて
わけの諸中とかりぬ。中条沢兼八郎。ふうきこの
今強勇のものとしかしべ。忠義ふうきこのどもへ。金剛小四郎と
うけど。必死の密談よりとりこ。ものとる。それとこいはひ。時
とはうりとこ。物こびかりつまくに。金剛をつうきとりゆくと。
の分ぐまへして。汐来をちうどうせぬ。敵代と。義の夢思
をとされ。今の時。良よ。あんで。ふ義ふたのふるまひ。高
といひつぐ。むあうまし。きんぞ。ありふ又。ふ。清四郎
ぐみかう。清五義七とて。こうこ三又。乃。紀のうか。ひこひの
月乃とふうこ。玉中一乃。美男。宮。魏世とぐまし。

うんあるとうりめ。出されぬ。そうとうれどりつうま。
を。懸ふうとくるぐ。中良く。ありひるへ。五義七しくへ。いま
だいくぐくのまをつとあつる。男にをわうどつぐある。紀をぐを
のを。あとうくちうさんをふ。俊。ありひ。五義七よむう
ひそのうくへいまぐ。義。年のあいひ。こうか。勇。仕のいぐ
とてをいくぐをあうさ。年。ぬれへ。ひせ。月。のうこうとて
をふ義とをふとをつ。ありのへあるべうず。ゆくとあぐさ
松。年の。男。やくと。死地よつうま。んくへ。五義の次。か
ろべ。れへ。作。時をちあく。五のうまよくへ。五義七。奥さあ
ぐ。あて。ぐ。ぐ。ぬとをいへ。五義七。ぐ。ぐ。ぬ。ぐ。ぬ。ぐ。ぬ。
月とうをたまりは。ぬうは。それぐ。りくうあ。歌。のご
とうとまぐくの。出。推。義。ふ。年。ぬ。五義。紀

のんやわる。りんさおがめをとうさがごよんてそらをしてい
いきていき甲斐いず。いそぎ冥途よりとひきて死まれ
ひつきまいりせんとやぐそものまくすもぐめぐ自害せんと
ちくりしとそ大義わりそすもぐめぐそ健気なりく感じたと
のたをもおくよいざるさころの義侠さりとへ感じ入りしぢや。ひ
うへいそを通ぐしさに。死生をとをかせられと。一味の盟書
をとり出せば。与義七名ぐを一同ふうへべ。名誉をのこをき
ぐしと。人名ここにおがしめられ。連判よりをへのる限生名の
面目。亡恩への恩をかふしこれかすぐいんとやぐて性名
をうきちる。血判をぐそうりる。かく義幸のものだよ
をたお義ふ死せんかりり。部を職をといまつる大地ずが
来練さへ。云後より絶しし申どもかり。莖昌伯を驚つ荒

貝十九郎の面人へ丹下どの。あなの恩顧伯よりくにをかた
だ服をしうりるぐだ義のんりつをふしてぞん後ろのの
なりし度。一味同志のをものどもの義侠をいすをとうをず。
さうく亡なを右門どのをそ。亡恩のうをられた門どのいまぐ生
しかうへ右門どのをらびとりてを亡恩のあをを郷ぜんと。あ
人とをかい賀右門をうつりて。猪金へとをせてゆく。勇ひり
義侠りたありしく。法人へこれをうんじをり

賀右門城中殉死辞宮の事

義八金ぐりをおりく金い酒をもりをりしくへぐ人のの
人りりぐれい大義中をを助へ城中の法伯の一和せざるやをを
をて。義侠をせんをとへうのひがくしと推量し。度量よよ
びをせうを称て法士よむうひをを南城。うけとりれ法

大名。近国寄おのて。義陳のうちこうてうぬ。くと南
城と。引てうてうとうしへ。ぬんかのいてうぬ。ぬ。ぬれど。
よて京と遠背ようとうんへおを。ぬ。ぬ。ぬ

あるいは人なりつまづき矣後なく城とそこそのみちて
ぐそとめぐらしそこ者のあるとを都どそこの時一番よ死と
なるなりぬ此後いろふさいへべきかくこれ同じ城をわけ
ちことべるふさぐまりあるて城地うけとりのち大名所
国付近日来居あるのうしさ紀ぐてきこしうべ嘆古
川外門へ山坂険沼の所をつらせぬふ私とあつめ橋
ぐを修理せさせ村ぐ里ぐ海岸まで巡検の男ん
をいまめぐうく制法をいぐ城下の町ぐ寺子小路を
取立をこあさせ城中家中の屋敷ぐへ被授の面を修
繕せさせ上役の来館をまち居うと役をそよ下ちわ
れば中居ぐ助迫ぐの城戸をを一家中の法士を
お臭して武義をのべ城中の法臭法を国郡よ

ちうし就上し冊下こぐぬたび武備法ぐちう武法のことを
ぐて作付られ生害仕りの法家中の者をとをぐふ
まぐうこ南りたそまりぬ法ぐて南城をうと上ア
ひうへ家中のものをあんいてうちうへたのこわげ
をりひぐ無紙をこれをのべそれば城地法れのあるこうあ
これぐうふをねぐひのこをりぐてこぐけあるとは接金よう人
ぐをかべ紙ぐ金ぐこをとべこぐこをりぐ城中城下まで
を掃除お金を入をぐし付し法ぐのうへ万事の仕ぐ法
面法をの国郡ぐ下。沼ぐ知ぐのぐいこちとぐんど入うと
こ紙ぐり。ぐ居ぐ今晩老柳とあて接金よ法をと
ぐ。家中のものをを通ぐ義とろふおあてへ法ぐへのぐこ法
事。飛みを出とべぐとわをべを非こ法事り部屋ぐあ

四国付庶へ式代し。脇とし引とうてぞ。ぐ遠義とろわ
ひとう夏。秋の末の葉のちりぐふちのゲうぐうとう見ゆく
わつ見たりし事たをりぞ。こに尾を右門へ乗るへの手蔵
を年金し。今へ堅固ゆりろ。笑市嘉中のをみどを。
脇地をわひをうてず方ふ離義せしとうぐうかうを見
ゆへうちのことを見へ丹下家系のをの左ぞ見ぐうをを
あををんへ浴室。離義せしが新味をうし。ぞ稽金を
志のびちりぞ見をうて。をの怨をを新じ。富ををちう
えんとやありへべをとて。庶祇のうちよををこうり用ん
をびしく号金し。塀をふいうふつをわげりをふく
し。ををし門をうをへ意殺寝どの表をををて。門
の出入り家内ひうをひ。傍俗男ぜをうをうず。てう

あひわうち。一通の物とてを門をてをかつち新を
をうり。書中をわうたあてのちとりつぞのをのを
りりてを見ぐをうぐけ。他ひ人へ一人を入見ど教代
お出入りの長旅屋をりかうん他のわうんどを逸をび
まてりうをの貴人をどへ中ぐ家ひをちざり
し。右門どのへうぐひうぐ。禁足をて居をうへ
べ。お新づまりあをひうんとて。勇卿ひ植村作
元。おとぐざの高田牧兵あ。をのかうへ他門出をおれを
ひどを。を夏ぐをとなぐをあやし。鶴揚ち。雑うん
ど。いろくを見をとうを見を。同をとを。毎日へ
あづらうず。毒をのうるひをかし。八百掛をうり
稽引をうけの他落ひうへ稽員。をづを決まつた

屋り小家。あるとあらゆる物ごとこれのこの金
どしてへいちうしかりどい。奥の一家しまいたり門どの
はとぎまこ八周んりたなとわりてこ大場をうしこさ
れ。忠義孝敬(ちうぎかうけい)とぞ言られる

忠義太平記大全巻之三終